

# 岩手県総合計画審議会 第2回「人口」検討部会（現地視察会） 記録

日時：平成24年10月23日（火）

9:45～16:00

場所：盛岡市、花巻市

## 出席者

別紙出席者名簿のとおり。（人口検討部会委員7人、県職員3人）

なお、報道関係者の傍聴は(株)三和ドレス本社視察において1社（盛岡タイムス）。

## 内容

### （1）視察 (株)三和ドレス本社（盛岡市）

説明者 大沢孫藏代表取締役

#### 【要旨】

- ・同社は昭和41年に設立し、本社工場（盛岡市）及び二戸工場（二戸市）で婦人服を製造している。
- ・地元から従業員を多く採用しており、平成13年以降、技能五輪全国大会へ従業員を本県代表として毎年送り出し、金賞や銀賞など多数の受賞者を輩出している。
- ・本社工場では、県内からの採用が多いが、二戸工場では、二戸市内からの採用が多い。
- ・従業員は女性が多く、子育てを行っている従業員は育児休暇を積極的に取得している。
- ・従業員は40～50歳過ぎまで働いている。勤続年数が長くなると技術が高くなるが、家庭の事情などにより出勤率が低くなるため、若い従業員が仕事の中心となる。
- ・若年層の人たちが地元に残るためには、インターンシップが役に立つと考えている。当社でも平成23年度には3校を受け入れた。
- ・大沢代表取締役は、社会福祉法人共生会の理事長として、特別養護老人ホームやグループホーム、指定居宅介護支援事業所を運営している。外国籍の介護職員の育成にも力を入れている。

### （2）昼食 農家レストラン「遊民」（花巻市）

説明者 (有)アグリ・プロ・ジャパン 高橋和子常務取締役

#### 【要旨】

- ・高橋常務取締役は、家族の協力を得ながら、予約制の仕出しレストランを経営。家族で農業も営んでおり、生産物を食材としている。
- ・平成8年以降の米価の値下がりを受け、これからは加工の時代であるという考えから、レストランを始めた。
- ・地域では、高齢化が進み、離農者が増えている状況。若い人たちが集団で農業に取り組む必要がある。
- ・グリーンツーリズムの取組を実施しており、参加した小中学生に農業・食糧の大切さについて話をしている。

### （3）視察 花巻市起業化支援センター（花巻市）

説明者 蛭沢秀一所長、佐藤亮統括コーディネーター

#### 【要旨】

- ・花巻市では、市直営施設として花巻市起業化支援センター、花巻市賃貸工場及び花巻市ビジネスインキュベータの3施設を花巻市新事業創出基盤施設とし、条例化している。
- ・市は、平成3年にベンチャー支援を全面に打ち出し、内発型振興をスタートさせた。平成6年には民間空工場を借上げ、花巻市起業化支援センターを試行的に開設。平成8年に現在のセンターの事業を開始している。
- ・誘致企業と地場企業の融合による取引拡大や今後予想される地域間企業間競争に向けた企業意識改革を目的として種々の事業を展開。
- ・花巻市起業化支援センターでは、レンタル研究室・工場棟及び解放試験機器などがあり、起業者育成を実施している。
- ・花巻市ビジネスインキュベータでは、レンタルルームがあり、新規成長15分野の新規事業展開を図る起業者育成を行うと共に県の協力により、平成22年度よりジョブカフェも併設している。
- ・花巻市起業化支援センター隣接の花巻市賃貸工場を整備し、創業者のセカンドステージとしての活用や地場企業の2次展開及び企業誘致などができる体制を整備している。
- ・花巻市新事業創出基盤施設は市と市技術振興協会が一体となって事業運営を行い、開設以来約300人の新規雇用を創出している。
- ・創業者や地域企業支援においては、同行や訪問を主体にヒアリングを中心に進め、安易に補助金や助成金に頼り切る開発や経営にならない様、コーディネート活動を推進している。

#### (4) NPO法人 いわて地域づくり支援センター（花巻市）

説明者 若菜千穂常務理事、吉村彩研究員

##### 【要旨】

- ・同センターは、市町村や住民、住民組織から地域づくり・地域活性化の相談が増えたことから、平成17年に設立し、地域づくり支援や政策提言・調査、被災地支援を実施している。
- ・地域づくり支援では、地域主体のスタートアップや人材育成・研修事業、住民全体による公園リフォームなどを実施している
- ・地域づくりの取組は、やればやるほど赤字になるが、委託されて実施する調査研究事業の費用を活用して実施している。
- ・地域出身者が帰りたいときに帰られる環境を作ろうと「ふるさと応援団」という取組を行っている。この取組では、地域出身者への情報誌の発行やホームページでの発信、集落行事の連絡等を実施している。
- ・「ふるさと応援団」の成果として、定住促進の効果はまだ目に見えていないものの、地域の人たちへの「地域づくりを続けていかないと！」という気持ちの励みとなっているほか、出身者である親が子供に情報誌を見せて喜んでおり、ふるさとの継承として役割を果たしている。
- ・地域づくりをやるうえで若者をどう巻き込むかが重要。「ふるさと応援団」の取組は、帰ってきた若者の仕事になり、取材で出ていくことは地域に溶け込むきっかけになる。
- ・定住促進は難しいが、地元から離れていても、お祭りの時などに半分住民のように帰ってくるのであれば、定住人口につながるのではと考えている。